

「生誕180年記念 吳昌碩の世界」
ご しょう せき

日時: 令和6年2月2日(金)・2月3日(土) 13:30～15:45

会場: 東京国立博物館 平成館大講堂



■2月2日(金)

第1講 13:30～13:50

「だれそれ！？吳昌碩」

—— 休憩(10分) ——

第2講 14:00～14:45

「清朝碑学派と吳昌碩」

—— 休憩(15分) ——

第3講 15:00～15:45

「上海画壇と吳昌碩」



■2月3日(土)

第4講 13:30～14:15

「朝倉文夫《吳昌碩像》について」

—— 休憩(15分) ——

第5講 14:30～15:45

「なぜなに！？吳昌碩」



○受講券について

受講券は、両日とも必ずお持ちいただき、大講堂入場時にご提示ください。

○本資料について

2日目のご入館時に正門で本資料をご提示ください。無料でご入館いただけます。

連続講座「生誕 180 年記念 吳昌碩の世界」

ごあいさつ

清時代の末期から中華民国の初期にかけて、詩・書・画・印に妙腕をふるった吳昌碩^{ごしょうせき}(1844～1927)は、清朝の掉尾を飾る文人として知られています。

吳昌碩は、古代文字の研究に励み、特に石鼓文^{せつこぶん}は晩年まで臨書し続けました。古拙な味わいを内包した吳昌碩の作風は多くの人々を魅了し、現代にいたるまで熱烈な愛好者がいます。

吳昌碩は日本の文化人や芸術家との交流も深く、日本に現存する作品も少なくありません。在世中から内外で高い評価を博した吳昌碩の世界をどうぞお楽しみください。

スケジュール

■2月 2日(金)

13:30～13:50

第1講「だれそれ！？吳昌碩」

富田淳（九州国立博物館長）

鍋島稲子（台東区立書道博物館主任研究員）

—— 休憩（10分） ——

14:00～14:45

第2講「清朝碑学派と吳昌碩」

六人部克典（東京国立博物館東洋室研究員）

—— 休憩（15分） ——

15:00～15:45

第3講「上海画壇と吳昌碩」

植松瑞希（東京国立博物館絵画・彫刻室主任研究員）

■2月 3日(土)

13:30～14:15

第4講「朝倉文夫《吳昌碩像》について」

戸張泰子（台東区立朝倉彫塑館主任研究員）

—— 休憩（15分） ——

14:30～15:45

第5講「なぜなに！？吳昌碩」

富田淳（九州国立博物館長）

鍋島稲子（台東区立書道博物館主任研究員）

第1講「だれそれ！？呉昌碩」

富田 淳（九州国立博物館 館長）

専門は中国書法史。

九州国立博物館副館長、東京国立博物館副館長を経て2023年10月より現職。主な論考は「常盤山文庫の書画コレクション」（『常盤山文庫 創立八十周年記念名品選 蒐集のまなざし』公益財団法人常盤山文庫、2023年）、「王羲之略伝—書聖のまなざし—」「変革者としての王羲之」（『連携企画20周年 王羲之と蘭亭序』公益財団法人台東区芸術文化財団、2023年）、「宋克の録蘭亭十三跋と銭博の摸宋蘭亭十三跋」（『書法漢学研究第32号』アートライフ社、2023年）。

鍋島 稲子（台東区立書道博物館 主任研究員）

専門は中国書法史。

台東区立書道博物館開設準備担当、研究員を経て2010年より現職。主な論考は「中林梧竹と蘭亭序」（『連携企画20周年 王羲之と蘭亭序』公益財団法人台東区芸術文化財団、2023年）、「趙孟頫の書画鑑識」「狩野派と趙孟頫」（『没後700年 趙孟頫とその時代—復古と伝承—』公益財団法人台東区芸術文化財団、2022年）、「書における近代的教養—清朝書学との交差をめぐって」（『明治の教養 変容する〈和〉〈漢〉〈洋〉』勉誠出版、2020年）。

第2講「清朝碑学派と呉昌碩」

六人部 克典（東京国立博物館 東洋室研究員）

専門は中国書法史。

台東区立書道博物館専門員、東京国立博物館アソシエイトフェローを経て2018年より現職。主な論考は「宋元明清における王羲之書法の展開」（『連携企画20周年 王羲之と蘭亭序』台東区芸術文化財団、2023年）、「元時代の文人書法」「趙孟頫書法の受容—文徵明と董其昌の褒貶—」（『没後700年 趙孟頫とその時代—復古と伝承—』台東区芸術文化財団、2022年）。

第3講「上海画壇と呉昌碩」

植松 瑞希（東京国立博物館 絵画・彫刻室主任研究員）

専門は中国絵画史。

大和文華館学芸部員を経て2016年より現職。主な論考は、『特集 江戸時代にもたらされた中国書画』（東京国立博物館、2021年）、『特集 宮廷から地方へ—明時代の絵画と書跡』（東京国立博物館、2021年）、『中国近代絵画の巨匠 齊白石』（広西美術出版社、2018年）。

第4講「朝倉文夫《吳昌碩像》について」

戸張 泰子（台東区立朝倉彫塑館 主任研究員）

専門は近代日本美術史。

台東区立朝倉彫塑館専門員、研究員を経て 2019 年より現職。近年は特別展「兄と弟 渡辺長男と朝倉文夫」（2023 年）、生誕 140 年特別展「アトリエの朝倉文夫」（2023 年）、特別展「歴史に学ぶ朝倉先生いのちの講義」（2021 年）などを企画、担当する。近時の論文に「《墓守》に至る道、《墓守》から続く道」（『猫と巡る 140 年、そして現在』平凡社、2023 年）、本展関係テキストに「吳昌碩・孫松・朝倉文夫—芸術家同士の交流」（『吳昌碩とその時代—苦鉄没後 90 年—』公益財団法人台東区芸術文化財団、2018 年）、「朝倉文夫 交流の書画」（『清時代の書—碑学派— ～鄧石如 生誕 270 年記念～』東京国立博物館・公益財団法人台東区芸術文化財団、2013 年）がある。京都芸術大学、女子美術大学大学院非常勤講師。

第5講「なぜなに！？吳昌碩」

富田 淳（九州国立博物館 館長）

鍋島 稲子（台東区立書道博物館 主任研究員）

第1講

「だれそれ！？吳昌碩」

九州国立博物館長

富田 淳

台東区立書道博物館主任研究員

鍋島稲子

【吳昌碩 Wu Changshuo プロフィール】

名	俊（しゅん）、俊卿（しゅんけい）
字	香圃（こうほ）、倉石（そうせき）、蒼石（そうせき）、昌碩（しょうせき）
号	缶廬（ふろ）、苦鉄（くてつ）、缶翁（ふおう）、老缶（ろうふ）、大聾（たいろう）など
室号	齊雲館（せいうんかん）、削觚廬（さっころ）、癖斯堂（へきしどう）など
生年	清・道光24年（1844）8月1日（新暦9月12日）甲辰
卒年	中華民国16年（1927）11月6日（新暦11月29日）丁卯 84歳
官職	光緒25年（1899）江蘇（こうそ）安東県（あんとうけん）の知事＜1ヶ月で辞職＞
出生地	浙江（せっこう）安吉県鄣吳（あんきつけんしょうご）＜安吉県安城の説もあり＞
民族	漢族
祖父	吳淵（ごえん）
父	吳辛申（ごしんこう）
母	萬氏＜太平天国の戦乱中に病死＞
弟	吳祥卿（ごようけい）＜太平天国の戦乱中に病死＞
妹	＜太平天国の戦乱中に餓死＞
許嫁	章氏＜太平天国の戦乱中に病死＞
継母	楊氏
妻	施酒（ししゅ）
息子	吳育（ごいく）、吳涵（ごかん）、吳邁（ごまい）
娘	吳丹姮（ごたんこう）
恩師	潘芝畦（はんしけい）、施浴升（せよくしょう）、朱正初（しゅせいしょ）、俞樾（ゆえつ）、 金樹本（きんじゅほん）、吳雲（ごうん）、楊岷（ようけん）、潘祖蔭（はんそいん）、 譚献（たんけん）、吳大澂（ごたいちょう）など
親友	施為（しし）、金傑（きんけつ）、高邕（こうよう）、汪煦（おうく）、蒲華（ほか）、 任伯年（じんはくねん）、沈石友（しんせきゆう）、長尾雨山（ながおうざん）など
弟子	徐星州（じょせいしゅう）、王一亭（おういつてい）、趙雲壑（ちょううんがく）、 劉玉庵（りゅうぎよくあん）、王个簣（おうかい）、孫松（そんしょう）など
尊敬する人	書…鍾繇（しょうよう）、顔真卿（がんしんけい）、楊沂孫（ようきそん）

	画…陳淳（ちんじゅん）、徐渭（じょい）、八大山人（はちだいさんじん）、 石濤（せきとう）、黄易（こうえき）
	印…鄧石如（とうせきじょ）、吳熙載（ごきさい）、徐三庚（じょさんこう）、 趙之謙（ちょうしけん）
好きな古典	石鼓文（せっこぶん）、泰山刻石（たいざんこくせき）など
好きな食物	筍、西瓜、枇杷
趣味	戯曲＜京劇のスター梅蘭芳（メイランファン）のファン＞

【吳昌碩の為人（ひととなり）】

- ❶ 幼い頃から父の吳辛甲について読書を始め、塾に通って勉学に励んだが、太平天国の乱(1851～1864)によって、17歳から21歳まで筆舌に尽くしがたい凄惨な避難生活を強いられた。
- ❷ 30代は、混乱と貧困に苦しみながらも、俞樾、吳雲、潘祖蔭、吳大澂ら収蔵家の知遇を得て、書画・拓本・青銅器・古印などを鑑賞し、少しずつ見識を広めていった。
- ❸ 37歳で25歳年長の楊峴と知り合い、彼を慕って39歳で蘇州に転居、楊峴の隣に家を構えた。
- ❹ 44歳の時に友人の資金援助で上海県丞の官職を買い、上海に転居。のち各地を転々とし、小官に甘んじながら売芸で糊口を凌いだ。
- ❺ 56歳で安東県の知事となるが、僅か1ヶ月で辞職。その後は書画印で生計を立てた。模索と葛藤の日々を送るが、60代には独自のスタイルが確立される。
- ❻ 宣統3年(1911)、清朝打倒を唱えた辛亥革命が勃発。翌年2月には宣統帝が退位し、300年近く続いた清朝は滅亡した。69歳の吳俊卿はこの年、名を吳昌碩と改めた。
- ❼ 70歳で西泠印社の社長に就任、芸苑の領袖となり、書画印を求める人も急増した。
- ❽ 70代は作品が最も多く優品も多い。80代には融通無碍の境地に達し、含蓄ある線質と淋漓たる表現は、余人の追隨を許さない。
- ❾ 吳昌碩の作品は数千に及ぶともいわれている。日本人の求めや助力によるところもあり、吳昌碩在世中の大正年間には、吳昌碩フィーバーともいえるほどの熱狂をもって迎えられた。
- ❿ 吳昌碩の作風は当代日本の芸術家に多くの示唆を与えたばかりでなく、時にはその創作活動の指針ともなり得るほどの影響力を誇っていた。

第2講

「清朝碑学派と呉昌碩」

東京国立博物館東洋室研究員
六人部 克典

1. 清朝碑学派の背景

- ・考証学、金石学の書・画・篆刻への波及。金石著録、字典類の刊行。
- ・法帖、伝統書法への懐疑。原初の字姿を伝える碑拓。
- ・従来対象とされなかった古典に基づく新様式の書。

2. 呉昌碩前夜の碑学派名家

鄧石如 清・乾隆8～嘉慶10年(1743～1805) 名：琰、石如／字：石如、頑伯／号：頑伯、完白
懷寧(安徽省)の人。布衣、書・篆刻を生業とする。篆書は石鼓文や李斯・李陽冰などの金石、隸書は史晨碑など各種の漢碑を徹底的に学ぶ。古典に根差した深淵な作風の篆隸のほか、行草にも新生面を開く。後世に絶大な影響を与えた碑学派の先駆者。

- ・四体帖 清・嘉慶2年(1797) 東京国立博物館蔵 TB-1298 【後期】
- ・行書五言絶句軸 清・18～19世紀 個人蔵 【前期】

呉熙載 清・嘉慶4～同治9年(1799～1870) 名：廷飏、熙載／字：熙載、讓之／号：晚学居士
儀徵(江蘇省)の人。布衣、書・画・篆刻・版刻を生業とする。書は包世臣に師事。楷行草は包の様式を継承。篆隸と篆刻は包が敬慕した鄧石如を規範とし、洗練された清澄な作風を築く。

- ・篆書張茂先勵志詩四屏 清・19世紀 東京国立博物館蔵 TB-1625 【後期】
- ・隸書八言聯 清・19世紀 東京国立博物館蔵 TB-1324 【前期】

楊沂孫 清・嘉慶17～光緒7年(1812～81) 字：詠春／号：子与、濠叟
常熟(江蘇省)の人。道光23年(1843)の挙人。鳳陽(安徽省)の府知事を務める。鄧石如に拮抗すると自負した篆書は、石鼓文風の大篆、鄧石如風の篆による作例があり、清純とも評される。

- ・篆書八言聯 清・光緒5年(1879) 東京国立博物館蔵 TB-1528 【前期】

Cf. 石鼓文 戦国・前5～前4世紀 東京国立博物館蔵 TB-1345 【後期】

胡澍 清・道光5～同治11年(1825～72) 字：荻甫／号：石生
績溪(安徽省)の人。咸豐9年(1859)の挙人。戸部郎中など中央官を務める。金石を好んだ篆書の名手。抑揚をつけた用筆で表情豊かな線質の小篆の作風を築く。親交を深めた趙之謙も胡澍の篆書を絶賛。

- ・篆書法言一節扇面 清・19世紀 東京国立博物館蔵 TB-1704 【前期】

趙之謙 清・道光9～光緒10年(1829～84) 字：益甫、搗叔／号：悲庵、无悶

会稽(浙江省)の人。咸豐9年(1859)の挙人。鄞陽、奉新、南城(江西省)の県知事を歴任。書・画・篆刻の名家。包世臣提唱の筆法「逆入平出」をもって、北魏書という雄渾な様式を創出。篆隸行草にも同様の筆法を応用し、独特の作風を築く。

- ・隸書張衡靈憲四屏 清・同治7年(1868) 東京国立博物館蔵 TB-1702 【前期】
- ・行書七言古詩四屏 清・光緒9年(1883) 東京国立博物館蔵 TB-1334 【後期】

3. 師と吳昌碩

楊峴 清・嘉慶24～光緒22年(1819～96) 字：見山／号：庸齋、遲鴻殘叟、藐翁

歸安(浙江省)の人。咸豐5年(1855)の挙人。常州、松江(江蘇省)の府知事を務める。晩年は蘇州(江蘇省)に隠棲し、吳昌碩が敬慕して親交を結ぶ。隸書の名手で、礼器碑など各種の漢碑を学び、動感と変化に富む作風を築く。

- ・隸書霓裳逸史四屏 清・光緒16年(1890) 東京国立博物館蔵 TB-1629 【後期】
- ・隸書六言聯 清・光緒17年(1891) 東京国立博物館蔵 TB-1699 【前期】

俞樾 清・道光1～光緒32年(1821～1906) 字：蔭甫／号：曲園

德清(浙江省)の人。道光30年(1850)の進士。河南省の学務・教育の監督官を務めたが、罷免されて蘇州や杭州(浙江省)の私立学校で教鞭をとる。吳昌碩は詒經精舍(杭州)で俞樾に教えを受ける。漢碑を学び、点画の虚飾を排した隸書の作風を築く。

- ・隸書八言聯 清・光緒28年(1902) 東京国立博物館蔵 TB-1539 【後期】

吳大澂 清・道光15～光緒28年(1835～1902) 字：止敬、清卿／号：憲齋、恒軒

吳興(江蘇省)の人。同治7年(1868)の進士。湖南省長官など要職を務め、吳昌碩が幕客として従軍した日清戦争で軍を統率するも敗戦の責を問われて罷免。金石・文字学に精通し、字典『説文古籀補』や考証を付した拓本集『憲齋集古録』を編纂した金文研究の第一人者。篆書は謹嚴な作風。

- ・篆書八言聯 清・同治8年(1869) 東京国立博物館蔵 TB-1536 【参考】
- ・古柏図軸 清・光緒14年(1888) 東京国立博物館蔵 TA-245 【後期】

吳昌碩 清・道光24～中華民國16年(1844～1927) 名：俊、俊卿／字：香圃、倉石、昌碩／号：缶廬、苦鉄安吉(浙江省)の人。同治11年(1872)より各地を歴遊し、杭州で俞樾、蘇州で楊峴に師事。吳雲や吳大澂ら、収蔵家・金石家の知遇も得て研鑽を積む。金石の研究、とりわけ終生続けた石鼓文の臨書は、吳昌碩の書・画・篆刻を「金石の氣」が横溢する芸術へと昇華させる。清朝碑学派の掉尾を飾る名家。

- ・篆書集石鼓字聯 清・19世紀 東京国立博物館蔵 TB-1710 【後期】
- ・篆書八言聯 中華民國6年(1917) 東京国立博物館蔵 TB-1542 【通期】
- ・篆書般若心經十二屏 中華民國6年(1917) 東京国立博物館蔵 TB-1421 【前期】
- ・行書「槐安」軸 中華民國15年(1926) 東京国立博物館蔵 TB-1643 【通期】

Cf. 石鼓文一阮氏重撫天一閣本一 阮元模 清・嘉慶2年(1797)、原刻：戦国・前5～前4世紀
東京国立博物館蔵 TB-59 【前期】

第3講

「上海画壇と吳昌碩」

東京国立博物館絵画・彫刻室主任研究員

植松 瑞希

1、上海の華やぎ

19世紀、ヨーロッパ諸国の租界が置かれた上海は急速に国際化し、経済的にも繁栄しました。この地は太平天国の乱（1850～64）からの避難地にもなって、多くの文化人が集まります。上海の新興富裕層の支持を得て活躍した巨匠たちを紹介します。

①張熊（1803～86）

嘉興（浙江省）出身、上海で活躍。伝統文人画を学び、華やかな没骨（輪郭線を用いない画法）の花卉図に優れた。

- ・傲憚寿平花卉図扇面（1877年、東京国立博物館蔵）

②胡公寿（1823～86）

胡遠。字の公寿で知られる。上海出身。虚谷、任伯年らと交流。透明感のある水墨で、山水、花卉を巧みに描いた。

- ・松菊猶存図軸（1878年、個人蔵）
- ・潤上奇松図軸（1878年、個人蔵）

③虚谷（1824～96）

僧侶。新安（安徽省）出身。清の武官の家に生まれたが、太平天国の乱の討伐に疑問を感じて出家した。優美で鋭い筆線の特徴とし、山水、花卉、金魚を得意とした。

- ・水仙図軸（個人蔵）

④任伯年（1840～95）

任頤。字の伯年で知られる。原籍は山陰（浙江省）。著名な画家を多く輩出した任一族の一人。古拙な人物画と瀟洒な花鳥画で人気を博した。

- ・藤竹水仙図軸（1879年、個人蔵）
- ・花鳥図扇面（個人蔵）

2、金石の氣と吳昌碩

金石学は、古代の青銅器や石刻などに見られる文字を研究する学問です。この金石学の盛行を背景に、清時代後期より、金石資料の様式を書跡さらには絵画表現にも活かそうとする文人書画家の活躍が目立つようになります。上海で活躍した吳昌碩を中心に、簡素で力強い筆線の特徴とする金石画派の作品を見ていきます。

①吳熙載（1799～1870）

吳讓之。熙載は初め字、のち名。儀徵（江蘇省）出身で、主に揚州で活動した。書家として名高く、金石画派の先駆的存在としても知られる。

- ・蟬過別枝図軸（個人蔵）

②趙之謙（1829～84）

会稽（浙江省）出身。咸豐9年（1859）の挙人（科挙の郷試合格者）でさまざまな県の役人を務める。金石学に傾倒し、その豪放な筆法を取り込んだ書画を制作して、金石画派の大家となった。

- ・花卉図四屏（1874年、東京国立博物館蔵）
- ・枇杷図軸（東京国立博物館蔵）

③吳昌碩（1844～1927）

安吉（浙江省）出身。20代から40代にかけ、杭州、蘇州、上海を歴遊し、書画篆刻を学び、任伯年ら上海画壇の巨匠の知遇も得る。光緒13年（1887）に一度、宣統3年（1911）に再び、上海に活動の拠点を設け、以降晩年までこの都市で文芸界の重鎮として活躍した。

- ・露氣図軸（1896年、個人蔵）
- ・徂徠松図軸（1915年、個人蔵）
- ・藤花爛漫図軸（1916年、個人蔵）
- ・水仙怪石図軸（1918年、東京国立博物館蔵）
- ・枇杷図軸（1920年、個人蔵）
- ・秋色爛斑図軸（1922年、東京国立博物館蔵）

3、呉昌碩を追いかけて

上海好みの洗練された華麗な彩色と、金石を学んだ書家ならではの質朴剛健な筆線の特徴とする呉昌碩の花卉図は、近代文人画の一つの頂点と位置付けられます。呉昌碩の影響を受けた、次世代の画家たちの作品を紹介します。

①王一亭（1867～1937）

王震。字の一亭で知られる。原籍は呉興（浙江省）だが、上海で生まれた。実業界で活躍するかたわら、絵画をたしなみ、呉昌碩に師事した。のち、その代作者も務めるようになる。

- ・芙蓉図軸（1926 年、個人蔵）
- ・鶏雛青藤図軸（1934 年、東京国立博物館蔵）
- ・巖頭野鶏図軸（1936 年、個人蔵）

②陳年（1876～1970）

陳半丁。山陰（浙江省）出身。上海で呉昌碩に書画を学び、1916 年、拠点を北京に移して、北京画壇の中心人物として活躍した。

- ・書画冊（1912 年、東京国立博物館蔵）

第4講

「朝倉文夫《吳昌碩像》について」

台東区立朝倉彫塑館主任研究員

戸張 泰子

1. 吳昌碩(1844~1927)と朝倉文夫(1883~1964)

交流の端緒となった《吳昌碩像》制作の経緯／接点検証

- 1919(大正8)年5月 劇俳優の梅蘭芳が朝倉のアトリエを訪問。朝倉が《梅蘭芳像》を制作
- 1921(大正10)年ころ 吳昌碩側から朝倉へ肖像彫刻の制作依頼(栗田某仲介)
- このとき《老松図軸(真龍)》《臨石鼓文額》(ともに吳昌碩1920年の作)が贈られる
- 1921(大正10)年6月 東台彫塑会第一回展に《梅蘭芳(像)》と《吳昌碩(像)》を出品
- 《吳昌碩像》(ブロンズ)が吳昌碩のもとに届く
- 西冷印社に設置(現存せず)
- 秋? 朝倉のもとに吳昌碩から返礼の作《神在箇中》《竹石図》(ともに吳昌碩1921年の作、為書きあり)と謝意を伝える書簡(九月朔付)が届く

2. 関東大震災時の朝倉文夫

関東大震災にまつわる記述(①②とも文中下線は発表者による)

① 『【未定稿】我家吾家物譚』亦復増設及改築

大正十二年九月一日、関東大震災のときは、美校の夏期講習をやっていた。何れの教室もモデルを使って、研究科などは、文展の搬入もあと一ヶ月に差迫って最も油の乗っている最中ぐらぐらとやりだしたのである。窓から飛び出す学生、モデル。中には裸体のままのモデルが衣類をかかえて悲鳴を上げている。

これ等を窓から押出して庭の方を見ると、桐の立木の下には二、三人づつ陣取って口も利けない有様である。さて、自分にかえって大丈夫という予感に任せ教官室にかけこんで帽子とステッキを手にし帰途についたのである。

校門を出る時から余程静かになって逸早く足を運んで宅の安否如何を念じ丁度、天王寺の五重の塔の十五間ばかり手前のところにかかると、第二震とおぼしき奴がやって来た、四、五間下って位置を定め、五重の塔の地震というものをゆっくり見物したのであった。

塔というもの、地震というもの、概念とは全く異なる現象であった。一口にいえばピンボケのした写真のように輪郭がぼやけて塔は垂直のまま動くものである。地震の揺れが止んで然る後ギューギューと冠を振り出しややしばらくやっている。鐘の音の余響のように揺れが止んだ。

帰宅してみると何等変った事もなかったがアトリエに入って吃驚した。制作は引くり返っている。こちらに首が飛んだり手が飛んだり、ただ血を見ぬがだけの修羅場さながらであった。但しこれを見て度胸はすわった。命とへらさえあればそれでよい。

早速老人に安政二年の大地震の話を聞いてみると、老人はその時下谷に住んでいたのが上野の山に一週間野宿したというのである。そして其時大そうな避難者であったというのである。それではこの谷中墓地あたりにもやって来るのじゃないかしら。若しやって来たら大変だ。こちらとしても夜分になって家の中では寝てられない。

仕事師を引張って来て足場丸太に使ったのならいくらでもあるからこれで大学墓地の広場に小屋掛をやろう、すべての責任は僕がもつ、近所近辺の若睦連もこんな時に働こうじゃないか 吾々はこうした墓所という地の利を有っているだけ避難者を収容する義務があるのだ。山口、上村、井戸岩こうした連中が大いに協力して、山口君は日暮里駅に行つて貨物車にかけのシートを借りて来た。これで屋根が出来た。床下は戸板を並べたり建築用の道板を並べたりその上に俵をほぐして敷き込みその又上に敷物を敷いて、こんな家が二軒忽ちのうちに出来上った。

この時のことを物語れば一冊の書物にもなりそうだがそれは省略するとして、ここに震災当時のことを持ち出したのは、井戸水というものについて言及したためである。(以下略)

朝倉文夫『【未定稿】我家吾家物語／朝倉彫塑館写真集』 台東区立朝倉彫塑館編、

公益財団法人 台東区芸術文化財団 2021(令和3)年 37 頁

② 『私の履歴書』 関東大震災

こんどの戦災と大正十二年の大震災と、私はいまの谷中天王寺の住居で二度災厄にあったのだが、幸いに二度とも無事だった。

関東大震災というと、上野の美術学校のことを思い出す。ちょうど学校で夏季講習会をやっている時だった。官立学校で夏季講習を始めたのは私が初めてだろう。

講習をしているとあの地震である。講習生も私も立ってられないくらいの大揺れだ。「廊下は危いから、窓から飛び出せ」とみんなを飛び出させ、学校の正面の大樹のかげに集めておいて、私は教官室へたどりつき講習をやめて帰ることにした。

帰宅の途中、先ごろ焼失してしまった谷中墓地の五重塔のところまで来たときまた揺れだした。五重塔が倒れるようだった。

大地震の中の五重塔というものは実に不思議なもので、激烈な上下動で揺れると塔がまるでピントのぼけた写真のようにビリビリとこまかく、急速度でふるえる。そして、やんだあとから大きく左右にギー、ギーと揺れる。

帰宅してアトリエへ行くと、彫刻が十一基倒れていた。すぐに墓へ避難小屋をつくったり、高台で水道が出なくなったので井戸水を給水したり、ロウソクを配ったりして下谷区から表彰されたが、作品で賞状はずいぶんもらったけれど、役所の賞状はこの時が初めてである。

さて学校へ行つて正木校長と一緒に被害を見回ったところ、文庫(書庫)の被害が最もひどく、屋根がはげてめちゃめちゃ。中にあったロダンの「青銅時代」がもろに倒れて粉みじんになっている。校長も啞然とするばかりだった。「私がついで見ましよう」といったが、無残に割れたのを復元できるとは校長も信じられなかったらしい。破片をすっかり掃き集めたら四百片ぐらいあった。それから弟子を二人手伝わせてまる八日間、私はロダンの破片と取り組んだ。

この「青銅時代」の石膏像は表面を黒く塗ってあったからよかった。もし白い石膏のままの色だったら不可能だったかもしれない。

折れた足の中に直径五分の真鍮の棒が入っているが、まず足を切り離して棒を元の角度に直し、破片を一つ一つ、よく点検するとどんな小片でもどの部分の破片かがわかってくる。弟子にはわからないが、私がピタリとあてるので驚嘆していた。しかしロダンにはちゃんといずれの部分でも確実に表現しているからわかるのだ。この仕事をしていて、たった一か所、ロダンもこのところをごまかしたなと思えるところがあるのを発見した。それは臂である。ただ丸いだけで、ほんとうの形ができていなかったと思う。

さて八日目に出来上った像は黒い大理石に白い縞がこまかに入ったようで、そのヒビ目が実に美しい。「校長、黒く塗るのは簡単ですがかえってこのまま残したらどうでしょう」というと「まるで名器に金接ぎをしたようだ」と賛成だった。

この再現した「青銅時代」を、日本へ持って来た日仏美術のデルスニスが後日見て、ぜひ、この像をもらいたいと言って、代りに鋳物を学校へ持ってきた。そして彼は画商をやめたので、学校には二つ残ってしまった。

ところが、このデルスニスが欲しいといった石膏像を誰かが指図して真っ黒く塗ってしまったし、誰かが型抜きして複製をこしらえたらしい。ずいぶん、ひどいことをすると私は落胆させられたが、せつかくのこまいヒビも黒く塗りつぶされたので、私の苦心も永久に消されてしまった。

だが、この仕事のおかげで私はロダンのテクニックを十分、探究することができた。同時に石膏取りの技巧などはフランスより日本の方がうまいことを知った。あのころいた宮島という石膏屋などは、たしかにパリの連中よりもすぐれた技倆を持っていたと思う。今日になると恐ろしかった大震災もとんだ勉強を私にさせてくれたとなつかしい思い出になっている。

『朝倉文夫文集 彫塑余滴』 台東区立朝倉彫塑館、財団法人 台東区芸術文化財団 2004（平成 16）年 304～307 頁

3. 朝倉彫塑館に残されたものから

朝倉彫塑塾→朝倉彫塑館

1964（昭和 39）年 朝倉文夫没

1967（昭和 42）年 朝倉彫塑館公開（遺族による）

1979（昭和 54）年 呉昌碩先生胸像復原委員会より《呉昌碩像》について問合せ

1986（昭和 61）年 朝倉彫塑館を台東区に移管。12 月、台東区立朝倉彫塑館開館

石膏原型検証

2009～2013（平成 21～25）年 保存修復工事。工事中、1924（大正 13）年建設の旧アトリエ地中に作品の破片が埋められていることが判明

4. 朝倉にとっての《呉昌碩像》

朝倉文夫《呉昌碩像》1921（大正 10）年 その作品の意味や価値／呉昌碩による評価

↑

呉昌碩《神在箇中》1921（大正 10）年

書簡

第 5 講

「なぜなに！？呉昌碩」

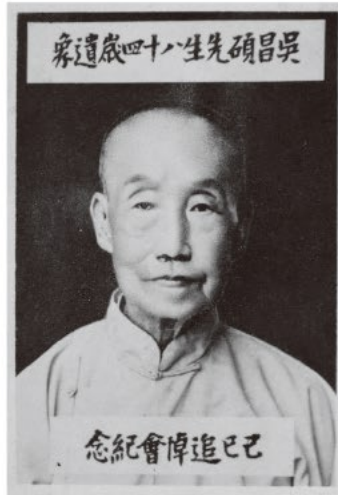
九州国立博物館長

富田 淳

台東区立書道博物館主任研究員

鍋島稻子

一八九二	光緒一八	壬辰	四九	・上海南の升吉里に住み、知果の官職を買う。	
一八九三	光緒一九	癸巳	五〇	・『任廬詩埒別存』の自序成る。	
一八九四	光緒二〇	甲午	五一	・俊卿と改名する。	
一八九五	光緒二一	乙未	五二	・日清戦争に際し、吳大澂の幕僚に迎えられる。	・六月、日清戦争勃発。
一八九六	光緒二二	丙申	五三	・二月、繼母の病篤く、休暇を願い出て南へ帰る。	
一八九九	光緒二五	己亥	五六	・二月、蘇州に在り、楊峴との往来が頻繁になる。	
一九〇〇	光緒二六	庚子	五七	・二月と五月に「破荷亭長」「破荷」等の印を作る。またこれ以前に「破荷亭記」を作る。	・楊峴没（七八歳） ・任伯年没（五七歳）
一九〇二	光緒二八	壬寅	五九	・河井荃廬来訪。以後、荃廬は隔年ごとに教えを請う。	・義和団事件起こる。
一九〇三	光緒二九	癸卯	六〇	・一月、繼母の楊氏が七七歳で没する。	・吳大澂没（六八歳）
一九〇四	光緒三〇	甲辰	六一	・長尾雨山が上海に移住、雨山は一九一四年まで滞在。	
一九〇六	光緒三二	丙午	六三	・趙雲壑を弟子に迎える。	・鶴岡蘇没（七五歳）
一九〇九	宣統一	己酉	六六	・一月、蘇州桂和坊一九号に転居し、書齋を癖斯堂と名付ける。	・俞樾没（八六歳）
一九一一	宣統三	辛亥	六八	・高崑、楊逸らとともに上海豫園書畫善会を発起。	
一九一二	宣統一	壬子	六九	・夏、公職を離れ、蘇州から上海に移り、吳淞に住む。	・辛亥革命起こる。 ・清華没（八二歳） ・端方没（五〇歳）
一九二三	宣統三	癸丑	七〇	・昌碩と改名する。	
一九二一	宣統三	辛亥	六八	・文求堂の田中慶太郎が「昌碩画存」を刊行。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・西泠印社が正式に成立し、社長に推される。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・王一亭が吳昌碩の門下に加わる。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・この頃、梅蘭芳に戯曲を学び、代わりに画を教える。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『任廬印存』二集成る。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・書画篆刻を求める者が多くなり、画題は花卉を主とする。山水、人物などは多くを王一亭や吳待秋が代筆する。	・楊守敬没（七六歳）
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『任廬印存』四集成る。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『苦鉄砕金』を、西泠印社より刊行。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・上海の海上題襟館金石書画会の名譽会長に推される。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・五月一日、妻の施氏没、七〇歳。	・沈石友没（六〇歳）
一九二二	宣統三	壬子	六九	・冬、長尾雨山主宰の寿蘇会に自作の詩を寄せる。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『吳昌碩画譜』が日本の文求堂から、「吳昌碩先生画帖」が長崎の双樹園から刊行。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・朝倉文夫が吳昌碩の胸像を制作。西泠印社に安置される。	・高崑没（七二歳）
一九二二	宣統三	壬子	六九	・至敬堂が田口米祐編『吳昌碩書画譜』を刊行。	・吳滔が職を辞めて上海に帰
一九二二	宣統三	壬子	六九	・浙江省出土の漢碑「三老諱字忌日記」を募金によって買い戻し、西泠印社内保存する。	り、王一亭の秘書となる。
一九二二	宣統三	壬子	六九	・大阪高島屋で吳昌碩書画展開催。	・吳隠没（五六歳）
一九二二	宣統三	壬子	六九	・谷上隆介編『伍翁墨戲』第一集が、大阪高島屋美術部から刊行。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・日下部鳴鶴が八五歳で没し、その墓碑を揮毫。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『伍翁近墨』が西泠印社から刊行される。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『吳昌碩画宝』が上海書画会から刊行される。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・五月、人力車が倒れて顔面に傷を負う。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『吳昌碩花果冊』が西泠印社から刊行。	・徐新周没（七三歳）
一九二二	宣統三	壬子	六九	・『伍翁近墨』第二集が大阪高島屋美術部から刊行。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・次男の吳滔が五二歳で没する。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・十一月二日晩、食卓の残紙に最後の蘭花を描き、これが絶筆となる。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・十一月三日、倒れ、十一月六日（新暦十一月二十九日）に没する。	
一九二二	宣統三	壬子	六九	・十一月、浙江省杭州市余杭区超山に葬られる。	



西暦	年号	干支	年齢	主要事項	備考
一八四四	道光二四	甲辰	一	・八月一日（新曆九月一二日）、浙江安吉に生まれる。	
一八四八	道光二八	戊申	五	・この頃、父について読書を始める。	
一八五一	咸豐一	辛亥	八	・この頃、他村の塾に出かける。	・太平天国の乱起こる。
一八五三	咸豐三	癸丑	一〇		・包世臣没（八一歳）
一八五五	咸豐五	乙卯	一二		
一八五六	咸豐六	丙辰	一三	・この頃から篆刻を学ぶ。	
一八六〇	咸豐一〇	庚申	一七	・正月、県学に入る。 ・太平天国の乱の戦火が安吉まで及ぶ。吳昌碩一家は離散。湖北省、安徽省などに難を避ける。	
一八六二	同治一	壬戌	一九	・三月中旬、吳昌碩の母に付き添って避難していた許嫁の章氏が病没。母の萬氏も病没。	
一八六四	同治三	甲子	二一	・鄭吳村へ帰り、父と合流。村の犠牲者は四千人、生存者二五人。すでに弟の祥卿は病没、妹は餓死。	・八月、太平天国の乱収束。
一八六五	同治四	乙丑	二二	・県学官潘芝畦の勧めで郷試に応じ、秀才となる。	
一八六六	同治五	丙寅	二三	・施浴升につき、詩や各家の書法を学び始める。	
一八六八	同治七	戊辰	二五	・父の辛申が病没。四八歳。	
一八七〇	同治九	庚午	二七	・『樸巢印存』成る。	・吳熙載没（七二歳）
一八七二	同治一一	壬申	二九	・浙江省帰安県菱湖鎮の施酒と結婚。 ・金傑に従い上海、蘇州へ行く。高邕や芸壇の名流と知り合う。 ・秋、杭州へ行き、歌麴に文章と文字訓詁の学を学ぶ。	
一八七三	同治一二	癸酉	三〇	・再び杭州へ行き、俞樾の詁経精舍に学ぶ。 ・安吉で潘芝畦から画梅を学ぶ。 ・長男の育が生まれる。	・何紹基没（七五歳）
一八七四	同治一三	甲戌	三一	・『蒼石齋集印』成る。	
一八七六	光緒二	丙子	三三	・『奇雲館印譜』成る。 ・次男の鴻が生まれる。	
一八七七	光緒三	丁丑	三四	・高邕の紹介で任伯年と知り合い、以後師友の仲となる。	
一八八〇	光緒六	庚辰	三七	・楊峴に書法と詩文を学ぶ。 ・蘇州の吳雲の両墨軒に寄寓し、豊富な金石資料を実見する機会を得る。	
一八八一	光緒七	辛巳	三八	・『鉄函山館印存』成る。	・楊沂孫没（六九歳）
一八八二	光緒八	壬午	三九	・春、継母と妻子を蘇州に迎え、定住する。 ・友人の資金援助で、江蘇省の小官になる。 ・四月九日、金傑から無款の古瓦缶を贈られ、缶廬と号する。 ・沈石友と知り合う。	・缶を贈ってしばらくの のち、金傑没
一八八三	光緒九	癸未	四〇	・この頃から五〇代後半まで、随時『削觚廬印存』を作る。 ・潘祖蔭と知り合い、所蔵の書跡、金石資料を鑑賞する。	・吳雲没（七三歳）
一八八四	光緒一〇	甲申	四一	・楊峴が『削觚廬印存』の題詩を作る。	・趙之謙没（五六歳） ・陳介祺没（七十二歳）
一八八六	光緒一二	丙戌	四三	・正月五日、三男の鴻が生まれる。	・張熊没（八四歳） ・胡適没（六四歳）
一八八七	光緒一三	丁亥	四四	・友人の資金援助で、上海県丞の官職を買い、上海に転居する。	
一八八八	光緒一四	戊子	四五	・長男の育が一六歳で没する。 ・八月、娘の丹姫が生まれる。	
一八八九	光緒一五	己丑	四六	・二月、『缶廬印存』の序を作る。	
一八九〇	光緒一六	庚寅	四七	・吳大澂と知り合う。	・潘祖蔭没（六一歳） ・徐三庚没（六五歳）
一八九一	光緒一七	辛卯	四八	・この頃日下部鳴鶴と親交を結び、印を作る。	
一八九二	光緒一八	壬辰	四九	・上海南の升吉里に住み、知県の官職を買う。	

① 「缶廬」「燕青亭長飯青燕主人」 吳昌碩刻
光緒 5 年（1879） 36 歲



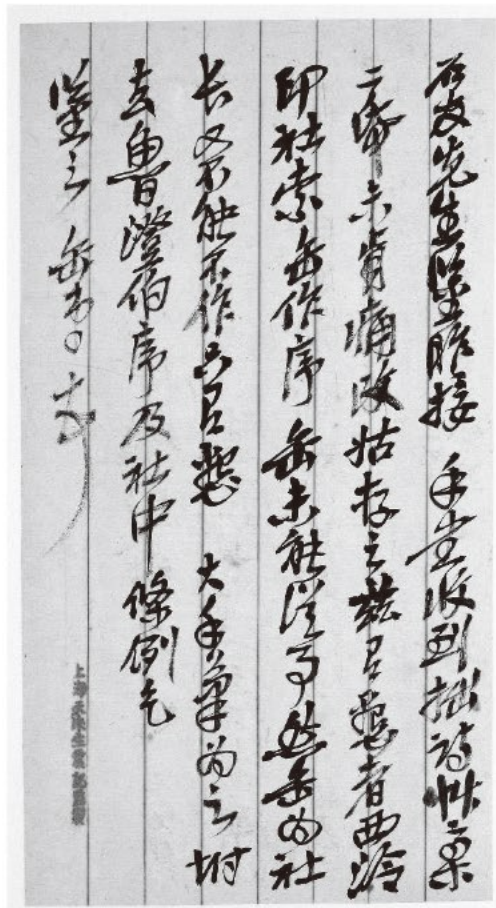
② 「一月安東令」 吳昌碩刻
光緒 25 年（1899） 56 歲



③ 沈石友宛尺牘 吳昌碩筆

「…茲有懇者西泠印社索缶作序。缶未能從事。然缶為社長又不能不作。…」

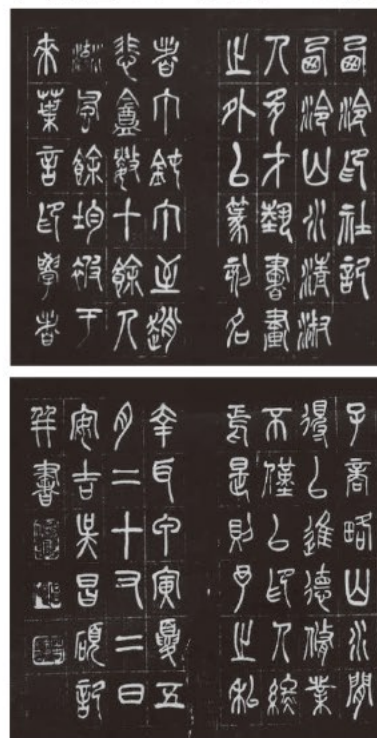
「…西泠印社の親しい者が、私に序を作することを求めてきましたが、私は（忙しくて）それに従事することができません。しかし私は社長であり、作らないわけにはいきません。…」



【参考】

西泠印社記 吳昌碩筆

中華民國 3 年（1914） 71 歲



令和 5 年度 東京国立博物館 連続講座
「生誕 180 年記念 吳昌碩の世界」

発 行 日：令和 6 年 2 月 2 日
編集・発行：東京国立博物館
制作・印刷：大協印刷株式会社

*本書の全部または一部を著者の許可なく転載・複製することを禁じます

平成館大講堂 座席表

